

Ⅱ－6 1950年代60年代の調査実践と研究キャリア形成 ——森岡清美の調査スタイル——

小林 多寿子

1 研究キャリア前半期—「わが研究遍歴」1985⁽¹⁾をもとに

本章は、森岡清美の約70年の研究者人生における研究キャリア展開に注目する視点に立って森岡資料群の位置づけを試みる。まず森岡の研究キャリア初期の調査を概観したい。とくに1950年代60年代のさまざまな調査と調査成果としての論文の関係に着目してその研究展開を検討する。森岡資料群はその多くが1950年代60年代におこなわれた調査資料から成っているので、まず森岡は1950年代60年代にどのような調査に取り組んだのかを具体的に把握しておきたい。

ついで、研究キャリア初期において重要な位置を占める1950年の労働省農村婦人生活調査と1950年から52年にかけてとりくんだ鳥村教会調査という二つの調査をとりあげる。これら二つの調査は、本格的な社会調査法を学んだり、調査成果にもとづく論文が高く評価されたりすることで研究者としての地歩を固めた研究キャリア上の重要なターニングポイントとなっている⁽²⁾。そこで本章の後半では、二つの調査についてそれぞれ森岡資料群にある資料をもとに具体的な調査内容について検討し、森岡が1950年代に独力で築きあげた自身の調査スタイルをあきらかにしたい。

1.1 八段階のあゆみ

森岡は、自らの研究の歩みについて節目ごとに振り返ってきた。その都度、年譜著作集を作成したり、自伝的なエッセイをあらわしたり、自伝そのものを出版したりして70年におよぶ研究生生活を跡づけている。それらのなかで自身による研究キャリアの明快な整理として注目したいのは、古希を迎えた際に編んだ『私の歩んだ道』（私家版、1993年）である。

そこに所収されている「わが研究遍歴」は1985年7月26日の日付の入ったエッセイであり、1923年生まれの森岡が61歳のときに書いたものである。約70年の研究キャリア前半期の終わりに1948年3月の大学卒業以降の研究歴を振り返り、研究成果のカテゴリーごとにそのキャリアを段階的に跡づけている。森岡自身による研究展開の段階的な把握は、調査実践と研究成果の関係をそのプロセスに沿って考えるのに有用である。

それによると、つぎの八つの段階で自身の研究キャリア前半の展開をとらえている。

- 一 出発 1948年
- 二 三つの単独調査 1948年から1950年まで3年間
- 三 研究者として基礎を固めた四つの論文 1952年から54年の3年間
- 四 真宗教団研究の前進と成果 1949年から60年
- 五 神社研究とキリスト教会研究 —神社祭祀組織研究1954-70年・キリスト教及びキリスト

教会研究 1953年から80年

六 家族研究への傾斜、とくに家族周期論への没頭 1965年から10年間

七 教団ライフサイクル論の登場 1970年から82年

八 組織モデルの歴史的变化 1979年から83年

八つの段階のうち一段階から三段階までは研究キャリアの基礎形成期としてとらえられる。それは、卒業論文を提出し東京文科大学特別研究生に採用されて研究生活をスタートさせた1948年4月に始まる。2年後の1950年4月に東京文科大学助手、1952年4月には東京教育大学専任講師となり、1954年10月に東京教育大学助教授になるまで、職階のうえでも研究者としての地位を段階的に固めていった時期である。この時期は若い研究者にとって研究の種まきの季節であり、種のなかから発芽して最初に実を結ぶ成果も得られた。手がけた調査研究のうちの一つに集中的に取り組んだのが四段階であり、基礎固め期ともいえるだろう。

後半期の五段階から八段階は、基礎形成期にまかれた複数の種のなかからいくつかが発芽してぐんぐん伸びていった時期である。研究内容が多様化し、それぞれ深化して、真宗教団研究、神社・キリスト教会研究、家族研究という後年に森岡の研究を代表する研究成果がつぎつぎとあらわされた。この時期は、研究キャリアの基礎展開期といえるだろう。

このような自己自身による段階区分をふまえて、森岡の研究キャリア前半期は、1960年までの基礎形成期と1962年以降の基礎展開期に分けて考えたい。1960年にそれまでの真宗教団研究を博士学位論文としてまとめて提出後、1年間のアメリカ留学へ出かけている。滞米中に学位が授与され、帰国後の1962年に初めての単著として刊行された。1960年代以降、森岡の論文や報告書等の執筆量は飛躍的に増加し、充実した多彩な研究成果が生みだされていった。その土台となった研究基礎形成期を築いた森岡の調査実践と業績の関係に注目したい。

八つの段階のうち、一から三段階について森岡の解説するところによると、つぎのとおりである⁽³⁾。

1.2 出発

卒業論文『日本農村社会の一類型』（1947年12月提出）では、1947年夏、郷里の村を中心に隣接の二つの村も加えた三か村（三重県阿山郡阿波村・布引村・山田村）を調査し、三つのレベルで村落社会をとらえ、とくに同族結合が希薄であることを論じた。倫理学専攻であった森岡が社会学へ向かう出発点となった研究である。当時の東京文科大学には社会学者も同輩もおらず、鈴木栄太郎の『日本農村社会学原理』（1940）をボロボロになるまで繰り返し読んで農村調査について学び、現地調査を独力で実践し、分析の視角を得た（森岡 1993:104, 2012:71-72）。鈴木栄太郎と喜多野清一の共著『農村社会調査』が出版されたのは1952年であり、当時、森岡にとって農村調査手引書はまだなかった（2014:59-61）。

手引きがないところで、自分でモノグラフにある項目を拾い出して、それを手掛かりとしてやる。それから整理をする場合に、鈴木流に圏を描いたりしました（2012.1.31）。

鈴木の本に学んだうえで、森岡がとったおもな方法は、資料収集と地図作成、そしてインタビューであった。現地の村ではまず役場へ行き、当時は閲覧可能であった壬申戸籍や地誌類等を見せてもらい、産業組合や寺院、神社等でも文書や書類などを閲覧した。必要とおもう資料は、複写機のない時代なのでノートに書き写していった。村全体の空間的配置を地図に書き込んでいくこともおこなった(2014:61)。地図に落としていく方法は、アメリカの農村社会学のギャルピン(Charles Josiah Galpin 1915 *The Social Anatomy of an Agricultural Community*)がウイスクンシン州で農村コミュニティを考察したやり方であり、鈴木栄太郎が日本の農村社会研究に応用した方法であった。

「鈴木先生流の調査」を取り入れて試みた最初の調査について、森岡は社会調査教育をまったく受ける機会をもつことなく取り組んだのであり、「本当に素朴というか、未熟というか、研究の出発点で野生児みたいですよ」という。「野生児の調査手法」であったと述べている(2014:61)。

1.3 三つの単独調査 1948年-50年

1948年から50年までの3年間は、東京文理科大学特別研究生および助手を務めた時期であった。森岡は、その間も研究の仕方や研究者のあり方について指導を受ける機会のないまま、関連文献を講読しつつ、自己の判断で単独の調査に乗り出し、三つの実証研究に取り組んだ。

- ①1948年 伊賀における宮座調査
- ②1949年 三重県真宗高田派寺院調査
- ③1950年 地方キリスト教会調査—伊達教会と島村教会

一つめは、1948年夏に郷里の隣村でおこなった宮座調査である。伊賀地方では村落社会において特権的な祭祀組織を構成する無足人といわれた郷土たちが神社の祭祀を司っており、無足人調査を通して宮座、とくに株座と村座の関係のなかに村落の社会構造をあきらかにしている。その成果は、「宮座と村落社会の構造—三重県阿山郡壬生野村春日神社の‘長屋祭’について—」として1949年にまとめており、後に「村落の階級構造と宮座」(1954)として公刊している。

この調査では、面接調査が中心であったが、観察も重要であったという。インタビュー、観察、文書記録の書写という三つの調査法で取り組んだ。「建造物の空間的配置を目で見るのが大切です。…面接調査が中心ですが、その時代から観察、文書記録の書写、この三つをやっていた」(2014:62)と、この時の調査について述べている。

二つめは、1949年の三重県真宗高田派寺院調査である。高田派寺院における本山-末寺、中本寺-末寺、末寺相互の関係、檀家と講の関係に着目しながら真宗教団を同族研究の視点から考察し、真宗教団は本山を総本家、末寺を分家とする同族団をみなしうることをあきらかにした。本調査の成果は、「仏教教団の構造—浄土真宗高田派の教団組織について—」としてまとめたものの未刊行であったが、その要点は後の博士学位論文(1960年提出)へ収斂された。

三つめは、1950年から取り組んだ地方キリスト教会調査である。終戦後まもなくキリスト教に出逢った森岡は国際基督教大学研究所の研究生となり、日本キリスト教団教育委員会の委嘱によ

る農村伝道のための実態調査をおこなった。1950年1月に福島県伊達教会と群馬県島村教会を訪ね、とくに島村教会調査に絞って1952年まで調査を進めた。

調査成果は、文化変容（acculturation）の視点から論じて、1953年に「日本農村における基督教の受容」⁽⁴⁾としてまとめた。この成果は、文化変容の実際を実証的にあきらかにした当時の最先端の研究であった。日本民族学会の学会誌『民族学研究』（17巻2号）では巻頭を飾る論文として掲載され、1954年3月には東京文理科大学閉学記念賞を授与される高い評価を得た論考となった。

単独で取り組んだこれら三つの調査はいずれも、後の研究展開への萌芽となった重要な調査であった。しかし、森岡によれば、これらの調査は調査教育をまったく受けずに自己流の調査法によるものであって、「野生児の調査手法」であったという。

だが、「野生児」にとって調査法を学ぶ絶好の機会が訪れた。それは、1950年8月の労働省婦人少年局による「農村婦人の生活調査」である。この調査は、「私の社会調査の明治維新」と位置づけられるような、まだ日本の大学教育で教えられていなかった社会調査法を実践的に体得できる画期的な機会であった。

1.4 「研究者として基礎を固めた四つの論文」

森岡の研究キャリアは1950年代にその基盤が形成された。とくに戦後日本を代表する宗教社会学者・家族社会学者として飛躍していく基礎は、1950年代前半に発表された四つの論文で築かれた。森岡自身は「研究者としての基礎を固めた四つの論文」として、1952年から54年にかけて東京文理科大学専任講師時代に発表したつぎの四つをあげている。

- ①1952年「中世末期本願寺教団における一家衆」⁽⁵⁾
- ②1953年「日本農村における基督教の受容」⁽⁶⁾
- ③1953年「家族研究の一視角—家族周期の理論と方法—」⁽⁷⁾
- ④1954年「村落の階級構造と宮座」⁽⁸⁾ ←1948年壬生野村川東調査

これらの四つの論文には、後の研究人生で追究されていく「研究志向とその守備範囲」が表出されており、つぎのように述べている。

「宗教、家族・村落、歴史といった共通項が見いだされ、私の後年の研究志向とその守備範囲がすでに形を成しているように思われる」（森岡 1993:107）

「宗教、家族・村落、歴史」という共通項は、後の研究展開から遡及したときに見いだされたものであって、当初より体系的な目標があったわけではけっしてなかった。

「問題意識、研究対象もしくは用いる資料のうえで、相互に密接な関連があったのではなく、いわば独立した形で出現した。研究の機縁があるところで、新しい工夫を凝らしてまとめた結果が、こういうことになった」（森岡 1993:107）

終戦後まもない、大学制度の変革期であり、いまだ大学において社会学が専門教育として十分に確立されていない時代であった。それでもたまたま巡りあった調査の小さな機縁を最大限に生かすことで自らの社会的な実証研究の基盤を構築していった。

①と③は文献研究が主であったが、②と④は複数回の現地調査で得た調査データをもとに論じられている。④は、1948年夏の三重県壬生野村での宮座調査をもとにした論述である。②のキリスト教会調査と④の宮座調査は、調査教育を受けていないという点でたとえ「野生児」の調査であったとしても、その後の森岡の調査スタイルの原型があらわれている。

③の1953年に発表された家族周期の論文は、1973年に刊行され、当時の家族研究の最先端を切り拓いた『家族周期論』の萌芽となった論考である。アメリカ農村社会学の文献研究と鈴木栄太郎の農村家族の「周期的律動」をとりあげ、後の家族周期論への素地となった。戦後の家族社会学における画期的な業績は、20年も前にその萌芽的研究が発表されていた。

1.5 「真宗教団研究の前進と成果」

1950年代は、真宗教団研究にも全力を尽くした時期であった。1951年夏、桜井徳太郎とともに出かけた石川県浅川村二俣での調査を皮切りに、1952年夏には九学会連合能登調査に加わる機会を得た。能登調査では、宗教班の一員として52年の石川県町野町川西、53年の越路町芹川での調査にたずさわった。その後、町野町での真宗寺院調査は1955年まで単独で繰り返しおこなっている。

真宗寺院調査は、町野町での調査によって、寺院ごとの門徒団と集落ごとの門徒団を講中と家門徒団という概念で真宗門徒団の構造をとらえられること、それと、真宗寺院における本坊-子寺関係を同族的な「家」制度の視点で論じられることをみいだした。この知見をさらに深めるために、1957年から59年にかけては、福井県での真宗高田派寺院調査へ進んでいる。

福井県三国町では、寺院の身分による寺院間の組結合、主従結合、与力結合をいう三種の結合の存在をあきらかにし、複数回の調査を重ねて、真宗寺院の重層構造を描き出した。

これら以外の真宗寺院調査も、下記のように、能登や福井県への調査の道中に立ち寄ったり、講演出張や学会出張の際に足を延ばしたりして精力的におこなった。

- 1955年 飛騨白川村の真宗寺院
- 1956年 栃木県南の真宗寺院
- 1957年 山形市の真宗寺院
- 1957年 金沢市・小松市の真宗寺院
- 1958年 茨城県西の真宗寺院
- 1958年 滋賀県湖北・湖東地帯の真宗寺院

これほど集中的に真宗寺院調査に注力し、その調査結果は着実に論文として発表していった。1960年までのあいだにあらわした真宗教団研究の論考はつぎのものがあげられている（森岡1993:108-109）。

1. 「真宗門徒の教団内婚」⁽⁹⁾ 1954 能登
2. 「能登の宗教生活」⁽¹⁰⁾ 1955 能登
3. 「重層的寺壇関係」⁽¹¹⁾ 1958 福井県三国町加戸
4. 「寺連合の諸類型」⁽¹²⁾ 1959 福井県坂井郡
5. 「近世真宗本山の猶子関係」⁽¹³⁾ 1960
6. 「真宗大坊をめぐる合力組織」⁽¹⁴⁾ 1960 福井県三国町加戸

森岡は、これらの論文に1949年から60年まで取り組んだ現地調査の成果も加えて、集大成として学位論文「真宗教団と『家』制度」にまとめ、1960年8月に東京文理科大学に提出した。翌61年に博士号を授与されている。1962年には学位論文は書籍『真宗教団と「家」制度』（創文社、1962）として刊行され、翌63年には日本宗教学会で姉崎賞が授与された。

博士論文は三百字詰めで1138枚におよび、書籍では約700頁の大作となった。これほどの作品を短期間にまとめあげることができたのは、「私の真宗教団研究が熟成の段階に入っていたこと」が第一の要因であった（森岡 2012:131）という。1950年代に数多くの真宗寺院調査を集中的におこない、その都度、論文にあらわしていたという積み重ねがあったことももう一つの大きな要因である。それだけではなく、本著が、「同族团的発想の真宗教団への適用の所産」（森岡 1993:109）であったと述べているとおり、有賀喜左衛門の家理論に導かれたという出発点から一貫して同族論の視点を貫いた成果であろう。1952年から53年の九学会連合能登調査で真宗寺院において本坊・小寺の関わりと真宗門徒団の構造分析という着想を得て、その着想を視点として追究し収斂させていったという集中型の研究を遂行した成果であった。

1960年9月から1年間、アメリカ合衆国へ留学し、ミシガン大学で研究生生活を送る。1961年夏に帰国後の1960年代は、研究の重点は家族社会学領域へ移っていた。森岡の研究キャリアは前半の第二期へ移行する⁽¹⁵⁾。

2 1960年代の多様な展開

2.1 家族社会学者として

1960年代は、家族社会学領域の研究活動で国際的に活躍の場が広がった。1965年9月ISA 国際社会学会家族研究委員会の国際家族研究セミナーを東京で開催することになり、家族社会学者の小山隆の懇請により事務局を引き受けた。セミナーの国際比較研究発表のために「しつけ」の共同調査を山梨県や東京都内で実施した。この調査によって、1952年に山梨県でおこなった家族緊張調査以降、初めての本格的な家族社会学的調査への取り組みが始まる。

1966年にはISAの世界社会学会議に参加し、家族周期について研究報告をおこなっている。国際家族セミナーでアメリカの家族社会学者ルーベン・ヒルと交流したことがきっかけとなって、1953年に発表していた先駆的な家族周期研究を再起動させることになる（森岡 2012:185, 2014:76）。研究の比重は、急速に家族社会学へ移っていった。

家族周期論研究にシフトした契機はもう一つあった。それは、1965年に社会保障研究所が設立され、非常勤研究員を委嘱され、中鉢正美を中心とする児童養育費調査に関わることになったこ

とにある。川崎市での労働者家族調査を端緒として、1966年の北会津村調査、1968年の掛川調査に参加して、その調査結果を家族周期の視点から分析を進めた。1970年73年に第二次、第三次掛川調査で高齢者世帯調査をおこない、家族周期の中期と後期のデータを得ている。これらの調査結果とともに1953年にあらわした家族周期論の先駆的な論考での先行研究のレビューやヒルの理論枠組みをあわせてまとめあげたのが1973年に刊行した『家族周期論』である。本書は、森岡の家族研究を代表する業績となり、戦後の家族社会学の第一人者として一層活躍の場を広げていった。

2.2 宗教社会学者として

同時期に、宗教社会学の領域での研究成果も着実に発表していた。とくに神社祭祀組織研究とキリスト教およびキリスト教会研究でつぎのような研究業績があげられている。1960年代以降の多方面での多産でかつ質の高い研究活動は驚異的である。

<神社研究とキリスト教会研究>

(1) 神社祭祀組織の研究

1. 「村落の階級構造と宮座」1954
2. 「北海道篠津兵村の展開と村落構造」1957
3. 「近郊化による地域構造の変化」1964
4. 「明治末期における集落神社の整理」1966
5. 「近郊化による神社信仰の変貌」1968
6. 「明治末期における集落神社の整理（2）」1969
7. 「明治天皇遥拝殿問題始末記」1969-70

(2) キリスト教およびキリスト教会の研究

1. 「日本農村における基督教の受容」1953 ←島村教会
2. 「地方小都市における基督教会の形成」1959 ←安中教会
3. 「日本農村における基督教の土着化」1965 ←日下部教会
4. 「地域社会の人口移動と基督教会の教勢」1966
5. 「‘外来宗教の土着化’をめぐる概念的整理」1972
6. 「入信説明理論—初期日本人キリスト信徒の場合—」1976
7. 「俗間信仰とキリスト教—維新时期浦上キリシタンの場合—」1978
8. 「上州の初代キリスト者たち」1979
9. 「仏教とキリスト教との対論」1980

これほど多産な研究活動を続けるなかで、森岡によると、真宗教団研究のほうはしばらく停滞したのである。

「ライフワークともいえるべき真宗教団の研究が大きくまとまったあと、アメリカ出張1年間の

空白も手伝って、暫く研究上の空白期があった」(森岡 1993:112)。

一年のアメリカ滞在もあったが、それよりも大きな要因となったのは、真宗教団研究の中軸であった「家」制度の視点と家族周期研究の視点が相互に生かされることのない、まったく異なるものであったことにあるという。

「『家』制度の視点からの真宗教団研究の成果が、家族周期の研究において生かされることはなかった。それは全く別個の研究領域だったのである」(森岡 1993:114)

ただ、1970年から取り組み始めた新宗教の研究では、新宗教の成立と展開過程を見る際に、周期的視点をとりいれて、教団ライフサイクル論という新たな研究領域を拓くことになる。1971年に妙智会調査に取り組み始めた。戦後に宗教法人となった法華経系の新宗教の教団研究において、教団の発展過程を見る際にライフサイクルの視点が有効であることを見だし、教団ライフサイクル論という視点での検討を開始している。

以上のように、森岡による「わが研究遍歴」にしたがって研究キャリア前半期の調査実践とその成果を概観してみた。このような研究過程のなかに森岡資料群を対照させてみると、この時期に取り組んだ調査のうちかなりの調査資料が含まれていることがわかる。そこで、調査資料をもとにどのような調査をいかにおこなったのか、調査データから何をいかに論じているのか、具体的な調査資料と調査成果の論文に即して検討してみたい。

本章で注目するのは、とくに、1950年の労働省農村婦人生活調査と1950年から52年にかけて取り組んだ島村教会調査という二つの調査である。農村婦人生活調査をとりあげるのは、「私の社会調査の明治維新」として森岡が位置づけていることにある。もう一つの島村教会調査は、同時期に単独でおこなった調査であったが、非常に優れた論文として評価される成果を得られたことにある。当時は「野生児の調査」であったかもしれないが、調査の成果は質の高いものになっている。どのような調査をおこなったのか、それはその後の森岡の調査実践をいかに基礎づけたのか、具体的な調査資料とのつきあわせを通して検討してみたい。

3 1950年代の調査からみる研究キャリア形成と調査スタイルの確立 1 —労働省「農村婦人生活調査」—

3.1 「私の社会調査の明治維新」

森岡清美は、1948年3月に東京文理科大学を卒業し、特別研究生となり、2年間、岡田謙の研究室で研究を続けた。1950年4月には助手として採用される。卒業論文では三重県阿山郡阿波村の村落調査、1948年夏には伊賀調査、1949年には三重県で真宗高田派寺院調査をおこなった。しかし、社会調査教育を受けたうえでの調査ではなく、社会調査のテキストも一冊しかなく、鈴木栄太郎の『日本農村社会学原理』を装丁がボロボロになるくらいまで読み込んだものの、森岡の表現によると社会調査については我流のままであった。

社会調査教育を受けていなかったことを当時の東京大学社会学研究室と比較して、次のように語っている。

東京文理科大学のような、粗末な、なんといいですか、プリミティブな、教育もしないようなところとは、東大は違う。あそこはちゃんとやっているんです。もう昭和戦中期から調査をやっています。

とくに昭和10年代は、戸田先生は分家慣行調査とかいろいろな村の比較調査をやっていました。調査室が地下1階にあって、卒業生から何人も優秀な農村社会学者が出ているのです。ですからあそこは本の形のテキストはなくても、どういうふうにするという調査のノウハウはちゃんとあるわけですよ。

昭和25年夏に福武先生は学生を使って4カ所調査をやるので忙しかった。私は調査について何も知らなかったけれども、手伝ってくれと。福武先生は、私がちょっとした教育を受けたくぐらいに思っていたのでしょう。(2012.1.31)

そんな折に本格的な社会調査法を学ぶ機会となったのが、1950年7月から8月にかけて参加した労働省婦人少年局による農村婦人生活調査であった。この機会が森岡にとっていかに貴重な学びの場となったかは自伝的な書きものの各所に記されている。さらにインタビューでもなんども言及している、「私の社会調査の明治維新」であったと。

そこで初めて私は調査というものの全貌をつかみました。全部で4カ村行きましたから、8月全部を費やしたけれども、本当にいい訓練で、私の社会調査の明治維新が来たわけです。それがいちばん大きい。(2012.1.31)

『年譜・著作目録』（再訂版2016）にはつぎのように記してある。

「1950年7月～8月 労働省婦人少年局「農村婦人の生活」調査に協力して、四か村を調査する。竹内利美・塚本哲人・杉政孝の三氏とともに、このときはじめて本格的な社会調査法を学ぶことができた」（森岡 2016:10）。

3.2 農村婦人生活調査とは

労働省婦人少年局の調査がいかなる調査であったのか、農村婦人生活調査の概要とそこでもちいられた調査法を紹介しよう。

1952年に出版された調査報告書のなかで、この調査の目的としてつぎのように記されている。

「この調査は、終戦後の婦人解放の大きな波のなかにあつて、農村婦人の生活はどんな状態にあるか、男子と同等の人格としてみとめられるべき新しい地位について、婦人たちはどれだけのことを認識しているかなどを調べるために、農村婦人の生活を、（1）村の社会構造及び農業経営に占める婦人の位置、（2）家庭における婦人の地位、（3）農村婦人の生活意識、の面から総

合的に調査し、その実態を明らかにすることを目的としたものである」(労働省婦人少年局1952:5)

森岡資料群のなかにある「農村婦人生活実態調査要綱案」は、調査員で共有されていたものであるが、そこにも農村婦人の立場について「新憲法施行後満4年を経た今日もなお殆ど変化していないとみられる現状がある」としている。終戦後、制度が大きく変化したのに戦前と変わらない婦人の立場への危機感が調査実施への動機としてあったことがわかる。

当時、労働省婦人少年局長であった藤田たきは、報告書の「はしがき」で、憲法や民法の改正によって婦人の地位が引き上げられ、労働基準法やその他の法律により女子労働者の労働条件が改善されたにもかかわらず、農村婦人の生活は低いままで、都市の婦人や労働婦人にくらべはるかに後れているのではないかという現状への強い懸念を表明している。農村婦人の地位の低さは日本婦人の地位の低さにつながるものであり、農村婦人の生活の向上なくしては婦人労働者の向上はありえないのではないかと問いかけ、農村婦人の地位向上をはかるための基礎資料とするために本調査が計画されたと述べている。

農村婦人の生活の実態を把握するため選ばれた調査地域は全国5つの村であった。農村婦人の生活は、とくに農業経営と密接に関連していること、そして村の社会構造と婦人の地位がむすびついていることを考え併せて、岩手県、山形県、群馬県、愛知県、岡山県から調査地域として選定されたのは、つぎの5つの村であった。

単作水田地帯	山形庄内平野	山形県東田川郡大和村
二毛作水田地帯	岡山水田地帯	岡山県都窪郡常盤村
養蚕地帯	群馬山間	群馬県甘楽郡額部村
商業的蔬菜栽培	名古屋近郊	愛知県西春日井郡春日村
山間畑作	岩手山村	岩手県下閉伊郡田野畑村

労働省婦人少年局は、本調査を企画するに際して、東京大学の福武直に助言を求めにいった。福武は、1950年夏に別の社会調査が予定されていたため、当時GHQのCIEに勤めていた竹内利美に調査の指導を依頼し、東大社会学研究室の助手であった塚本哲人と大学院生の杉政孝が調査をになうことになった。森岡は、福武より声をかけられ、急遽、参加することになったという。

調査は、竹内利美が主導し、森岡清美のほか、塚本哲人、杉政孝の調査協力者と労働省婦人少年局の職員がともに調査概要の検討と調査票作成をおこない、1950年7月には全員で群馬県額部村に行き、プリテストも兼ねて調査をおこなった。

資料群のなかに「農村婦人生活実態調査出張計画」の記された紙がある。それによると、8月に実施される調査予定がわかる。8月前半は、山形県、岩手県、後半は愛知県、岡山県での調査を予定し、山形調査・愛知調査は森岡と塚本、岩手調査と岡山調査は竹内と杉が同行し、総勢14名の労働省の職員名が出張者として記されている(資料5-A参照)。森岡によれば、山形と愛知調査に加え、竹内と杉が岡山調査に行けなくなったため、急遽、愛知調査からその足で岡山へ向かった。結局、森岡は5か村のうち、4か村の調査に参加し、調査地を離れたのは8月末日であった。

この出張計画から調査実施の状況がわかる。いずれも調査地で7泊8日の日程が組まれ、調査地に到着した初日は対象者抽出、二日目から四日間を意識調査にあて、六日めは事例調査、七日めは座談会、八日めに離村となっている。東京から夜行列車で現地へ向かい、山形から岩手へ、愛知から岡山へはその足で移動しており、強行軍の日程であった。

表 5-A 「農村婦人生活実態調査出張計画」

山形県東田川郡大和村（出張者 木下・藤井・北川・岩佐・大山ちか子—森岡・塚本）		
8月3日	上野発 21時40分	秋田行
4日	鶴岡着 11時45分	対象者抽出
5日～8日		意識調査
9日		事例調査
10日		座談会
11日		離村
岩手県下閉伊郡田野畑村（出張者 木下・藤井・原田・高松—竹内・杉）		
8月11日	上野発18時5分	青森行急行 盛岡 4時32分
12日		対象者抽出
13日～16日		意識調査
17日		事例調査
18日		座談会
19日		離村
愛知県西春日井郡春日村（出張者 石井・野口・富田・丸山・佐々木恭子—森岡・塚本）		
8月16日	東京発23時	名古屋行
17日	名古屋着 6時3分	対象者抽出
18日～21日		意識調査
22日		事例調査
23日		座談会
24日		離村
岡山県都窪郡常盤村（出張者 石井・野口・内藤・渡辺—竹内・杉）		
8月23日	東京発21時	広島行 京都発 7時42分
24日	岡山	対象者抽出
25日～28日		意識調査
29日		事例調査
30日		座談会
31日		離村

3.3 実際の調査

森岡資料群にある「農村婦人生活実態調査要綱案」によると、調査事項として、1. 調査地域の概要、2. 村の社会構造及び家における婦人の地位、3. 婦人の生活意識の測定、があげられ

ている。これらの調査事項に対応して、具体的には、1. 調査地域の概要では、村の沿革、地形、土地、人口及び産業、教育、文化等を調べること、2. 村の社会構造及び家における婦人の地位では、(1) 村落構造機能と婦人、(2) 家庭における婦人の生活実態、(3) 婚姻その他の家族慣習と婦人について調べること、3. 婦人の生活意識の測定では、(1) 家事及び労働、(2) 村の交際、(3) 子供の養育、(4) 婚姻、(5) 教養及び娯楽、(6) 政治に対する関心等について、その現状に対する考え及び将来に対する希望を調査することがあげられている。

実際の現地調査では、村の概況については、役場や組合などの記録、統計という既存の資料を利用したうえで、①婦人の生活意識調査、②世帯調査、③事例調査、という3種類の調査を実施した。

① 生活意識調査は、村の農家台帳より18歳以上の婦人100名を等間隔抽出法 interval sampling で抽出し、家族関係、労働、生活改善についての意見、社会的関心などについて面接調査をおこなう。

② 世帯調査は、調査村の特定の部落を選定し、部落内の全戸に対して農家経営規模、家族構成、家族の生業および管理、家事の分担、家の来歴などを調査する。

③ 事例調査は、調査村で選定された特定の部落のなかで、上・中・下の階層から約10戸の農家を選定し、綿密な面接調査 (intensive interview) を実施する。とくに婦人の人生を考慮した生活史の作成もめざす。

これらの3種類の調査に対応した、「意識調査質問票」「事例調査項目」が森岡資料のなかにある。「意識調査質問票」では17の設問が用意されて、設問への回答をとおして、個人と家の関係、生活改善についての意見、婦人の労働面における寄与の程度と意識、家における婦人の地位、教養・娯楽、社会的関心という6点についてとらえようとしている。

たとえば、社会的関心では、「新しい法律によって「女の立場」がどんな風になりましたでしょうか」「そのためにこの村で女の人たちがよくなったということがありますか」と、戦後の憲法や民法の改正が村における「女の立場」の変化としていかに意識しているかを問うている。設問15では、直近の1950年6月4日の参議院議員選挙について投票行動を尋ねており、女性参政権が獲得されて5年目の農村婦人の政治参加の実態をあきらかにしようとしている。

ちなみに、投票行動について問うた結果は、村による差異が大きく出ていた。投票率については、岩手県田野畑村以外の投票率は、全国女子平均投票率66.7%を上回っていた。群馬県額部村と山形県大和村の高率が際立っている。その一方で、「候補者をどのようにして決めたか」を問うと、自分で決めたという人の割合は、額部村が57%で、5か村中もっとも低い(表5-B、表5-C参照)。

このような実態をふまえて「戦後の婦人の地位の最も大きな変化は、婦人が男子と同様に投票し、投票される権利を得たことであった。しかし、この選挙を通して婦人も国や村の政治に参加することの大きな意義は、村の婦人にはまだよく徹底していない」(労働省婦人少年局 1952:21)と指摘されている。

表5-B 「1950年6月4日参議院議員選挙投票状況」

1950年6月4日参議院議員選挙投票状況		[表49 (1952:134) をもとに筆者作成]	
	調査対象者	全村女子有権者	
岩手県田野畑村	49.3%	37.4%	
山形県大和村	91.9%	85.8%	
群馬県額部村	96.5%	99.9%	
愛知県春日村	86.3%	67.0%	
岡山県常盤村	81.1%	73.0%	

表5-C 「1950年6月4日参議院議員選挙候補者の決定」

投票対象とする候補者の決定					[表50 (1952:134) をもとに筆者作成]				
	自分で決めた	家族と相談して決めた	すすめられた	N.A.					
岩手県田野畑村	71%	22%	5%	2%					
山形県大和村	72%	23%	4%	1%					
群馬県額部村	57%	40%	3%						
愛知県春日村	74%	18%	7%	1%					
岡山県常盤村	69%	27%	4%						

事例調査は、各村で社会階層に配慮して選んだ約10名の農村婦人に綿密なインタビュー intensive interview を実施している。その際に尋ねる項目は「事例調査項目」として4頁にわたり記されている。「過去の生活経験」として7項目、「家庭における生活」として11項目、さらに細分化された事項も用意され、詳細なインタビューガイドである（表5-D参照）。

森岡資料群にある「事例調査項目」には森岡による鉛筆書きで「女の一生のモノグラフをつくること」というメモが記されている。事例調査事項の前半分は、「I 過去の生活経験」として、「幼年期」「少女期—学校生活」「娘時代—卒業後」「結婚」「結婚後の生活（現在）」「母としての経験」という順番で質問項目が並び、たとえば「幼年期」では「出生地」「生家の職業」「出生時の父母の年齢、続柄、一緒に育った兄妹」というさらに細分化された事項が列挙されている。

これらを順に尋ねて、ていねいに聞き取っていくならば、農村婦人のライフヒストリーをとらえることができたであろう。調査報告書にも「事例調査、生活史の作成」⁽¹⁷⁾と調査の概要に記されており、明確に「生活史」という言葉で、農村婦人のライフヒストリーを構成しようとしたことがわかる。調査報告書には具体的な個別の生活史は記載されていないが、農村婦人の一生を念頭において生活史を作成したいという目当てがあった。森岡が調査に先立って打ち合わせで聞いた「女の一生のモノグラフ」をめざすというねらいは、調査に臨む際に共有されていたのであろう。

表5-D 農村婦人生活調査における「事例調査項目」

I 過去の生活経験 (記載票別添)	
A 幼年期	1 出生地 2 生家の職業 3 出生時/父母の年齢、続柄、一緒に育った兄妹
B 少女期—学校生活	1 学歴(小学校名 中学校名) 2 影響力のあった教師 現在/交渉 3 好きだった学課 運動 4 その当時の志望 5 同窓の友人 親しかった人 現在交際している人 6 遊び友達 現在の交際程度 7 一番印象に残っている事件(子供時代)
C 娘時代—卒業後	1 仕事 家庭の仕事、就職経験の有無 あればその時代 2 技芸 3 趣味 4 感銘の深かった書物 5 交友関係、現在の交際程度 6 団体活動の有無、役員の経験の有無 7 将来の志望、結婚に対する考え方 8 一番印象深かった事件
D 結婚	1 縁談 最初に縁談のあった時の年齢 2 現在の夫との交渉(婚姻前)、家の関係 3 結婚を決めた動機 4 婚約中の交際 5 仲人との関係 6 その他
E 結婚後の生活(現在)	1 変った家庭環境に入って一番困ったこと、辛かったこと、楽しかったこと 2 家族との交際 3 村人との交際 新しい友人関係
F 母としての経験	1 子供の人数 2 子供のしつけの仕方 3 将来に対する考え方(教育、職業、結婚) 4 子供—将来してもらいたいとおもうこと
G 一般社会に関して	1 旅行の経験 イ 一番遠くへ行った場所 年齢 ロ 県外への旅行回数 場所 目的 2 他郷人との交際 3 婦人団体役員、その他の公職についての経験 4 宗教団体との交渉
II 家庭における生活	
A 家族構成	
B 家の経営状況	
C 家計の概要	
D 家族の労働分担	
E 住居	1 間取り図(部屋の名前) 2 各部屋の使い方 a 食事・用水 b 寝室 c 応待と招宴 d 作業場 e 宗門・神仏 3 屋敷—利用の仕方、屋敷神、屋敷林 4 照明と暖房 5 燃料
F 食生活	1 主食の種類—(自給と配給) 2 副食(自給と買入) 3 調味料(自給と買入) 4 嗜好品(酒・タバコ・菓子等) 5 食事の回数(農繁期と農閑期) 間食の回数 6 野良の食事 7 子供の間食 8 年中行事と食物—(晴の日の食物) 9 招客の場合の食物
G 衣生活	1 寝具 2 仕事着の種類 3 晴衣 4 肌着 5 衣類の補給(衣料の買入 裁縫) 6 嫁入の持参着物 結婚後の新調 7 履物・被物
H 保健衛生	1 休息 a 野良仕事の小憩・昼寝 b 野良仕事を休む日 2 睡眠・入浴 3 清掃(毎日の掃除、大掃除) 4 医療—医療、売薬・自給薬品、加持祈祷
I 教養娯楽	1 新聞と雑誌、読書 2 Radio 3 映画、芝居 etc. 4 運動会、その他催物 5 その他の伝統的な娯楽—盆踊、村祭 6 趣味 7 旅行
J 祭祀	1 家の祭祀—一年中行事、産土神 2 家の宗旨 3 本人の信仰 4 宗教に対する考え方
K 交際	1 個人の関係(友人、同窓、同郷) 2 家・関係(日常、正月、盆・祭、吉凶)(農耕、建築 etc) a 本家分家 b 親類 c 近隣、部落 d 村 3 贈答(時期の品物)

3.4 「農村婦人生活調査」と竹内利美

森岡は、1950年夏の労働省婦人少年局による「農村婦人の生活」調査についてそのいきさつをつぎのように詳細に語っている(2012.1.31)。少し長くなるが引用しよう。

森岡：私にとっての調査の大転換は、昭和25年の夏、起きました。そのときは大学助手になっていました。ところが、ちゃんとした教育を本当に受けてないんですよ。ほんとう、放し飼

いみたいでした。何をしてもいい、多少義務はありましたけどもね、特研究生はね。何も教えてくれないんですよ。自分で餌を探してこい、春には帰ってこいというぐらいですよ、ハハ（笑）。何をしてもいい代わりに、何の指導もしてもらえない。放し飼いでね。

ところが昭和25年の7月頃ですが、福武直さん（1917-89）から声がかかってきて、労働省婦人少年局の婦人課で「農村婦人の生活」という調査をするから手伝ってくれないか。聞いたら、福武先生はちょっと忙しいとのこと。…（中略。以下同じ）

福武先生は自分では行けないので、竹内利美さん（1904-2000）に代役を頼んだ。竹内さんは当時GHQの民間情報教育局CIEというところに勤務しておられた。そこは日本の社会情勢についていろいろ情報収集をするなかで、実態調査もやるわけです。調査経験のある日本の社会学者と、民族学、民俗学のほうで名の知れた人を集めて調査をやっていたんです。…

竹内さんは、後に東北大へ行かれるのですが、彼が「農村婦人の生活調査」の主査を務めました。この方は民俗学ですけど、有賀先生と親しいということもあり、もう一つCIEにアメリカの農村社会学者や人類学者が来て、たとえば農地解放の農村社会に対する影響の調査などをしたから、アメリカの農村社会学調査はどうするかということを知っています。日本の調査とアメリカの調査の両方を知る立場で、リーダーとしてたいへんふさわしい方でした。竹内利美さんのほかで、塚本哲人君（1925-2008）がいました。彼は東大の助手をしていました。…もう一人、杉政孝（1922- ）という人が参加しました。…杉さんは大学院生でした。塚本君、杉さん、私と3人が手伝った。何も知らなかったので、この調査でずいぶん教えられましたね。1カ月ぐらい集中的に準備をして、まず全戸調査の調査票を作りました。…

アンケートを意識調査とすれば、それとはまた別にね、具体的な調査項目を列挙し、そこに埋めていくという。…書き込む。構造化された調査票です。スケジュールと呼ぶようです。

…それは事実についてね。意見、意識についてはクエスチョネアを準備し、別に抽出した対象について意識調査をやった。それからもう一つ、非常に綿密な面接調査です。10人くらい綿密な調査ができる人を選んで面接する。調査の大項目は並んでいるが、具体的な細かい項目はない。この3種の調査票を作成して、5カ村に行ったんです。

最初は群馬県甘楽郡額部という村でした。養蚕の村でした。群馬県では西南です。もう一つは山形県の庄内平野の大和村、水田単作の村でした。それから岩手県の田野畑村、山間畑作地です。それから名古屋近郊の、春日村と言いましたが、大都市近郊の野菜栽培の村。それから岡山県の総社の近くの村、水田二毛作地でした。

最初、みんなで群馬県へ行って、4人いますから、後は2人ずつ組んでね、二つずつ受け持つ。

私は庄内平野と名古屋近郊の二つ持った他に、竹内さんと塚本君が都合がつかないので、2人が予定しておりました岡山県に一人で行きました。婦人課の女性事務官10人ぐらいが一緒に行くわけです。調査票だけ作ってシンクタンクに丸投げするのではなくて自分で行ったんですよ。本当に真面目によくやりました。感心しました。森山真弓という内閣官房長官や大臣をやった人がいるでしょう。あの人はそのとき、この春入ったばかりの新人

でした（笑）。

そこで初めて私は調査というものの全貌をつかみました。全部で4カ村行きましたから、8月全部を費やしたけれども、本当にいい訓練で、私の社会調査の明治維新が来たわけです。それがいちばん大きい。その当時は、先ほど言いましたように、社会調査の手引き書は全然なかった。何もないです。福武さんが安田三郎君(1925-89)と一緒に翻訳したG.A. ランドバーグの *Social Research* (1942, 訳1952) と並行して、ポーリン・ヤングという人の *Scientific Social Surveys and Research* (1939)、後者のほうが私にとってよい手引きになりましたね。(2012.1.31)

森岡によると、福武直は労働省より調査の指導を依頼されたものの、夏の予定がすでに決まっていたため、代わりにGHQのCIE（民間情報教育局）に勤務していた竹内利美⁽¹⁸⁾に依頼し、協力者として東京大学社会学科助手の塚本哲人、大学院生の杉政孝を推薦し、さらに4月に東京文理科大学助手になったばかりの森岡にも声をかけてくれたという。

当時のCIEでは、日本の優れた実証研究の専門家が、来日したアメリカの文化人類学者や農村社会学者に協力して、農地改革の農村社会への影響を調査しており、アメリカの最新の学術情報や調査方法論に接していた。竹内は、民俗学者であったが、実態調査についての日本側の経験とアメリカ側の経験を吸収しうる立場にあった。労働省の農村婦人生活調査の企画も、調査経験の豊かな竹内を中心に立案されたという（森岡 2012:99-100）。

この調査に参加したことで、森岡は、「こうして、五か村のうち四か村に出かけ、かれこれ一か月を現地調査に費やしたが、全戸の世帯調査、等間隔抽出の意識調査、詳細な事例調査といった現地調査のさまざまな技法を習得する願ってもない機会」を得たのである（森岡 2012:100）。

農村婦人生活調査は、ここに指摘された「全戸の世帯調査」「等間隔抽出の意識調査」「事例調査」を含み、当時としては非常に先進的な調査実践であった。とくに、調査目的に適った調査地の選定、量的調査と質的調査を組み合わせた複数の調査法の適用、事前の調査内容の検討、調査対象者の抽出、調査者全員参加による群馬県調査という予備調査（プリテスト）の実施、効率的な調査地訪問計画等、非常によく練られたリサーチデザインであった。サンプリングやインタビュー・インタビュー等、それまでの日本では十分に知られていなかった調査法も導入されている。さらに、調査主体である労働省婦人少年局職員自身が現地に足を運び、調査員となって現地調査に取り組んだ点も高く評価されている。

このような非常に組織化された社会調査の実践が可能になった要因の一つは、竹内利美が調査のリーダーシップをとったことによる。本調査のやりかたは、当時、CIEの手掛けていた社会調査と同じようなスタイルであり、竹内のCIEでの調査経験が存分に反映されているとおもう。CIEの及ぼした影響がここにみえてくる。その点について検討しておこう。

3.5 CIEにおける社会調査

1953年2月に刊行された『季刊民族学研究』⁽¹⁹⁾（第17巻第1号）は、「社会調査」の特集号として、社会調査の歴史や現状で全編が構成されている。文化人類学者、民族学者をはじめ社会学者や民俗学者ら総勢20人が参加して二日間にわたる座談会で語った言葉がそのまま掲載されている。そ

れは、日本における戦前期の社会調査の沿革や日本における社会調査の傾向など、社会調査の総合的な概観と紹介となっている。

この特集でもっとも注目したいのは、「CIEにおける社会調査の展開」の項である。CIEは、1945年9月から終戦後の日本を統治したGHQ 連合軍総司令部によって文化教育宗教の領域の施策を担当する部局として設けられた民間情報教育局 Civil Information and Educational section の略称である。1952年4月までの占領期の日本で、関圭吾、喜多野清一、鈴木栄太郎、小山隆、竹内利美、桜田勝徳等、社会学、文化人類学等の戦前戦後の社会調査を手掛けた第一線の研究者が関わっていた。CIEに勤めた社会学者、人類学者らは、戦後の日本の社会科学、とくに社会調査の領域においてアメリカの影響をもたらしたことが指摘されてきたが、そこでおこなわれた調査活動の具体的な内容はあまり知られていない。本特集のための座談会は1952年というCIEの終了期に開かれており、CIEで働いていた関圭吾、桜田勝徳、小山隆、竹内利美が語っていることはCIEの調査活動の生々しい証言といえるだろう。

関敬吾がCIEにおける調査の詳細を1946年当時から1951年にかけて時間を追って語っている。それによると、世論調査と社会調査、二つの分野で調査活動がおこなわれた。世論調査では、戦後の日本で新聞社による世論調査をはじめとしてマスメディアや自治体による世論調査が続々と実施されるようになった。1946年には輿論科学協会等の調査機関が設立され、戦後民主主義の発展のなかで「世論の尊重」が基本理念の一つとして重視されるようになった。そのような時代状況のなかで、関によると、世論調査の実施にはGHQの許可が必要であり、CIEでは毎週世論調査をチェックすることが仕事であったという。

社会調査では、当初は文献調査中心であったが、喜多野清一や小山隆らに関わるようになって、日本の農村を調べるようになった。彼らは伊豆の対島村（現・伊東市）に疎開していた鈴木栄太郎を訪ね彼の参加を懇請した。その後、鈴木栄太郎が加わり、「日本社会の基礎的構造の研究」を第一の主題に掲げ、家族、村落、都市、国民社会を課題とすることで話しあった。1947年になって、農地改革による日本の農村の変化を調査するためにアメリカ農務省からレーパーが来日し、CIEで農村調査がはじまった。

1948年になると、調査票を作成しプリテストしたうえで、サンプリングをもとに本調査の実施という調査法がとられるようになる。1948年から1949年にかけて、CIEに関わった日本人研究者がもっとも充実した調査を実施した時期だったのではないだろうか。

関が回顧している調査の手順は、専門家の意見聴取、関係官庁で資料収集のうえ、調査目標、調査内容、実施方法を文書化し、プリテストを実施することがあげられている。さらに実際の調査方法は、インタビュー（intensive interview）、attitude survey（調査票による意識調査）、統計資料収集、調査表への記入というこれら4つの方法を併行しておこなった。関によれば、CIEでの調査は歴史的な調査ではなく、現状調査であり、調査から理論を導きだすことはめざしていなかったが、量的調査と質的調査、両方の調査をおこない、調査方法への反省もなされていたという。

3.6 1949年の山村調査と竹内利美

そのなかで、1947年からCIEに勤めた竹内利美が関わっていた山村調査に注目したい。

竹内は、CIEで1949年におこなった山村調査を詳細に紹介している。この調査は、森林法改正にからみ伐採制限が山村生活にあたえる影響をとらえるという目的で、栃木県鹿沼市で実施した林業地の調査である。

1949年3月から7月まで5か月にわたり、いろいろな調査法を組み合わせ、段階的総合的に取り組んだ調査である。1949年3月、まず「探索的予行踏査」をおこなった。CIEのベネット、シルス、カミングス、東大の島田錦蔵、林野庁職員等も一緒に現地を訪問して議論し、問題を絞り上げた。それをもとに調査を設計し、4月には3週間にわたり4つの山村を調査した。山村調査は、①統計資料の作成、②サンプリングをもとにした態度調査、③林業関係者の各階層から主な人を選びインテンシブ・インタビュー調査という3つの調査からなっていた。態度調査 attitude surveyとは意識調査ともいわれる調査票調査で、リストをもとにしたサンプリングによって対象者を抽出し、山村をジープで回り、訪問面接法によって実施した。その後、5月に鹿沼市調査、6月7月には補充調査として、宇都宮市における森林組合連合会等の関係者との座談会形式のグループインタビューを実施している。

この山村調査は、竹内が中心となって取り組まれた調査であったが、CIEでは農村調査、漁村調査、家族調査等もおこなわれていた。いずれもそれまでの日本の社会調査でなされていたのは大きく異なった調査であり、体系的に組み立てられた社会調査が実施されていた。サンプリングによる調査票調査、サンプリングのためのリスト作成作業、訪問面接による調査実施、インテンシブなインタビュー調査、これらの量的調査と質的調査を組み合わせ、段階を踏んで取り組む調査のやりかたは戦後社会調査で取り組まれるようになる方法のさきがけであった。

竹内は、1950年におこなわれた労働省婦人少年局による「農村婦人の生活」調査で協力を求められ、調査指導を担っている⁽²⁰⁾。労働省「農村婦人調査」は、森岡資料群に保存されていた当時の調査資料をていねいにみていくと、竹内がCIEで取り組んでいた調査のやりかたがそのまま踏襲されて反映された調査設計であったことがわかる。

4 1950年代の調査からみる研究キャリア形成と調査スタイルの確立2 —島村教会調査—

4.1 島村教会調査の経緯

森岡の宗教社会学的調査のなかで、キリスト教会調査は1950年1月の伊達教会・島村教会調査に始まる。

森岡がキリスト教会調査に関わるようになったきっかけは、自身がキリスト教信仰を得たことによっている。東京文理科大学に在学中、ドイツ人宣教師によるドイツ語学習の際にキリスト教に触れる機会があった。森岡は、キリスト教の信仰に求めるものがあり、1948年3月、大学卒業前に洗礼を受け、熱心な信徒になった。キリスト教への入信がきっかけとなって、キリスト教会調査へ発展していくつながりが生まれている。

森岡は、戦後まもなくキリスト教主義に立つ国際的な大学を創設する計画のもとで国際基督教大学研究所が設立されたとき、研究生に応募し、1948年4月に採用された。この研究所でともに研究生だった東京大学大学院で教育学専攻の特別研究生・古銭良一郎から日本基督教団の教会教

育委員会の研究の助力を依頼された。農村教会の教会教育を研究するという課題であり、その実態調査に際して、すでに調査経験のある森岡は、依頼に応じて一緒に調査することにした。

日本基督教団の農村伝道専門委員である肥後吉秀牧師が勤めていた群馬県島村教会と、もう一つ、礼拝集会を主宰していた酒枝義旗の紹介で福島県伊達教会、これら二つの教会を対象とすることにし、1950年1月伊達教会にともにでかけた。しかし、現地調査が合わなかった古銭は調査から離脱し、島村教会での調査は森岡一人で取り組むことになった。調査成果は、森岡にとって初期の代表的論文の一つとなる（森岡 2012:73-81）。

群馬県佐波郡島村は、現在、伊勢崎市に合併されている利根川の流域の農村で、埼玉県本庄市、深谷市と接する県境の村であった。利根川の中州にある、かつてダムによる治水以前には何度も大洪水に見舞われた、氾濫原の村であった。

森岡は、1950年1月27日から30日、1951年10月7日から10日、1952年5月27日から30日、と3回にわたり島村教会調査をおこなっている。第一回調査では、島村のほかに、教会信者のいる隣接地域の埼玉県宮戸村（現・本庄市宮戸）でも調査した。

森岡が1950年から52年にかけて実施した島村教会調査で得た資料やフィールドノート、メモなどの調査資料データは、第1回、第2回、第3回、それと1950年調査時におこなった宮戸村調査、それぞれの調査ごとに4つの茶封筒に入れられ、封筒には表書きがされて束ねられている。

まず、森岡の解説を紹介し、島村教会調査資料の概要を記し、さらにこの調査の成果である論文との関係でおこなわれた調査の特徴を考えたい。

4.2 森岡の解説

森岡は、島村教会調査について、2014年2月24日に当時の調査資料群を前にしてつぎのように説明している⁽²¹⁾。

森岡：群馬県、これからいきましょう、1950年ですね、

小林：群馬県の島村教会ですか。

森岡：そうです。報告はしております、『民族学研究』ででした。

小林：何年？

森岡：あれはね、1953年3月、「日本農村における基督教の受容」。

これは日本基督教団のなんか委員会があって、農村教会の幼児教育かなんかの委員会かあって、たまたま知り合った東大の特別研究生が頼まれたんです、一緒に行ってくれないかと。一緒に島村に行くことになっていて、そしてもう一か所くらいというので、当時、私、キリスト教会に行ってみて、そこで、酒枝義旗（サカエダヨシタカ）という早稲田の先生ね、この先生の紹介で、これは伊達教会って福島県の教会なんですよ。そこの信者、有力な人が酒枝先生のうちに非常にやっかいになって、居候したりしていたので、そこへ行って、調査をして、その東大の特研生、教育学部の人も来て、一回来ただけで彼はいやになった、そういう調査をね。つまらんとおもったかどうかしらんが、「後、君やってくれないか」っていうから。

私は、実はやりたかったんですよ。どういうことかという、日本の文化に全然性格の

違うのがぶつかった場合ね、日本の文化を知るにはそれをながめる分度器が必要ですが、違う異質のものをぶつけてどんな反応をするかということで、そういうなかでどうかという考察があるじゃないですか。そりゃ、物質でもそうだとおもいます。

小林：異文化接触ですか。

森岡：接触で日本文化をわかる。日本文化があきらかになる、日本文化だけを見るのではなくて、ぶつけてみて違うものを、同質でないものを。キリスト教は非常に違いますから、もともとはぶつけたらどんな現象がおこるか知りたかったんですよ。

それでね、「よし、島村教会行こう」と、一人で、その年からずっと始めて、肥後という先生でしたね、牧師でしたね。

小林：肥後吉秀さん。

森岡：肥後吉秀さんのやっかいになって、泊まって、調査をして、信者のうちをずいぶん訪ねて、それで書いたのがこれなんです。これ、大変評判になったんですよ、この論文が。

日本における acculturation という問題の最初の研究っていつてもらってね。『民族学研究』で赤いタイトルで巻頭を飾らせてもらってね、大変これは愉快的な思いをさせてもらった論文です。そのときの資料です。(2014.1.24)

4.3 島村教会調査資料

島村教会調査は、3回の調査ごとに調査資料が茶色B5の封筒に入れてまとめられ、それぞれつぎのような表書きがある。

〔群馬県佐波郡島村 第一回社会調査 昭和二十五年一月二十八日一三十一日 肥後吉秀・栗原勘三氏〕

〔昭和二十六年十月七日(日)一十日(水) 第二回島村教会調査 金井公平・信一・時夫・境野憲介・栗原保定・勘三・一・田島武幸・嘉之・後藤一男・町田義男・肥後吉秀〕

〔群馬県佐波郡島村 第3回社会調査 昭和二十七年五月二十七日一三十日 肥後吉秀・金井公平・田島太平・田島耕次郎・田島通弘・田島おしん・田島正樹・小林春男・栗原勘三・栗原謙二・栗原一〕

〔埼玉県児玉郡藤田村宮戸 第一回社会調査 昭和二十五年一月二十八日一三十一日 金井公平・同信一氏〕

第一回島村教会調査(1950年1月28日~31日)の資料にはつぎのようなものが入っている。

聞き書き：牧師・牧師夫人・二名の信者(栗原勘三、肥後吉秀、田島郷次郎、肥後夫人)

島村郷土誌・佐波郡誌より関連事項筆写一島村教会、島村人物、地勢、米作養蚕 etc.

村の66名世帯主名と住宅地図作成

島村役場メモ一村民税賦課談、字別戸数と人口(計413戸2464人)、学童数変遷表(昭和22年364人)

島村において調査するにあたり注意すべき点

農地改革について意見書一ガリ版印刷物

住宅地図

人物と歴史 / 農民生活と環境についてのメモ

たとえば聞き書き資料では、「栗原氏聞書 栗原勘三氏75歳」と記して25字×12行の原稿用紙9枚に手書きで縦書きに聞き取られた話がびっしり書きこまれており、他の聞き書きも同様に語りが手書きで記されている。

島村役場メモでは、村民税賦課談として納税額上位者の順位が付された村民名や、字別戸数と人口（計413戸、2464人）学童数変遷表（昭和22年 364人）が書かれている。

村の教会周辺の字の世帯主名と住宅地図が手書きで作成されている。

島村郷土誌や佐波郡誌から島村教会調査にかかわる事項の筆写も多くある。その事項とは、島村教会、島村人物、地勢、米作養蚕等の項目である。

第一回調査では、埼玉県児玉郡藤田村宮戸（現・本庄市宮戸）での調査もおこなっており、島村調査とは別の茶封筒に入れられ独立した括りにされている。宮戸には明治期の設立当初から島村教会を支えた数軒の信者家族があり、とくに江戸時代より名主を務めた旧家である金井家の人びとのなかに信者家族があった。インタビュー調査での語りに加えて、金井家の家系図や江戸期の名主書状や備前堀、中山道に関わる古文書の写しが資料のなかにはいつている。

埼玉県児玉郡藤田村宮戸の調査（1950年1月28日～31日）

宮戸の信者二名（金井公平・金井信一）インタビュー

金井家系図＋メモ

古文書の写し—江戸期・名主書状、備前堀と中山道

第二回島村教会調査（1951年10月7日～10日）は、島村教会関係の歴史的資料を島村郷土誌や佐波郡誌より筆写したり、明治期の朝野新聞や基督教新聞から島村関連記事を筆写したり、主要信者の田島、町田、栗原家の家系図、基督者家庭名簿の作成している。これらに加えて、世帯別調査票を用いた聞き取り調査によって作成された10世帯分の個票があることが特筆される。

島村教会関係史料—島村郷土誌より抄録、佐波郡誌より抄録、基督教新聞より

朝野新聞より島村関連記事の筆写

家系図作成—田島、町田、栗原

基督者家庭名簿—宮戸、新野、新地、立作、北岡

世帯別調査票—10世帯分（栗原保定、栗原勘三、須藤一男、金井信一、金井公平、金井晶夫、境野憲介、田島正樹、小林春男、栗原謙久）

第3回島村教会調査（1952年5月27日～30日）は、インタビュー調査が中心であった。男性13名、女性3名、合計16名の聞き書きが入っている。とくに代々、島村教会の有力な信者であった「基督者家族」に、第一回調査について二回目のインタビューをした人もある。それら有力な基督者家族の家系図も作成している。調査で解き明かしたいことなどのフィールドワークのための

メモがあり、その内容はしだいに調査の焦点が定まってきていることを示している。

フィールドワーク・メモー調査内容についてのメモ

祖先とキリスト教の神の関係、なぜ祖先を祀るのか

衣食住に関するキリスト教の影響—生活の合理化と結びつくのか

蚕種学の成長とキリスト教の成長の関係

初代キリスト者の手紙・日記を集めること

インタビュー16名

家系図—田島・栗原・町田・須藤 +メモ

4.4 島村教会調査のプロセス

3回にわたる島村教会調査で得た資料やフィールドノートからわかるのは、森岡が取り組んだ調査の進め方と集めた調査資料の種類である。

第一回調査では、まず歴史的史料や文書資料等、調査地にかかわる文献資料を集めること、そして現地で役場へ行き、人口や世帯等についての地域情報を得ることをおこなっている。当時は、壬申戸籍の閲覧が可能であったという。複写機のない時代であり、史資料はすべて手書きで筆写されている。主だった関係者計4名にもインタビューしている。

この調査をとおして、1886（明治19）年、利根川流域の小さな農村集落であった島村で宣教が開始された当時の様子がだんだんとあきらかになる。しだいに、島村における蚕種業の発展とキリスト教布教とのかかわりが深く存在することがみえてきた。

蚕種業とは蚕の産卵した蚕紙を製造して養蚕農家に出荷する製造業である。よりよい生糸生産のために蚕の生育方法の改良も手がけ、明治期に蚕種は輸出産業の一翼を担っていた。江戸期以来、優良な蚕種を生産していた島村は明治時代になって大きく発展するチャンスがやってきた。

島村には、2014年、世界遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産として指定された「田島弥平旧宅」がある。田島弥平は江戸時代より蚕種業にたずさわって、蚕種業の発展を牽引した島村の代表的な蚕種業者であった。島村の田島弥平旧宅の周辺には蚕種業と養蚕に従事した家々が現在も5軒ほど残っている。それらの家は、屋根の上に櫓を乗せた二階建ての長方形の主屋と桑場、蚕室からなる敷地を低い石垣で囲った独特の養蚕農家の外観をしている。島村における蚕種・養蚕業はいまは途絶してしまったが、1950年代はまだ戦前期の実態を知る人たちが多かった。森岡は、島村の蚕種業とキリスト教受容の関係に着目し、明治初期の島村の蚕種業と蚕種業者について調査を進めた。

1897年には島村教会の教会堂が建てられた。1900年頃までに受洗した人たちは、第一に蚕種業者、第二に有力な蚕種業者の家族、使用人、あるいは近い分家が多くを占めており、村の上層および中層の上に位置する有力な蚕種業者の複数のものがキリスト教の信徒となった。明治初め、田島らが島村勸業会社を作り横浜へ進出やイタリアへ蚕種の直輸出を試みて勸業会社から派遣を出すなど独自の蚕種業を展開したことに森岡は注目した。その積極的進取の精神は蚕種業界のエトスとしてキリスト教への接近を容易にしたとみる。しかしその一方で、蚕種業において培われる投機性は、キリスト教の理解を表面的なものとしさせる可能性もなかったわけではない。農村地

域でありながら、「高度の換金性をもつ生産、否、純然たる商品としての蚕種製造に携わることによって、自らの都市的な生活態度と雰囲気を醸成し」、その結果としてキリスト教の受容が進んだのではないかと考察している（森岡 1953:10）。

明治期の島村にとって利根川がもたらした利点も見逃せない。水運による東京への交通の至便と良質の桑の木の生長という利根川がもたらした恵みが蚕種業発展の素地となった。これらの点も含めて、明治期の島村における蚕種業について、『島村郷土誌（1）』、田島武平保寿履歴書、『群馬県蚕糸業沿革調査所』、田島邦寧『続養蚕新論』、『島村勸業会社定款』等の文献資料を駆使して島村の蚕種業のエトスを森岡は論じている。第一回目の調査では、これらの史資料や役場がもつ統計資料などを収集している。

第二回目の調査では、1951年当時の島村教会信者の世帯調査をおこなっている。世帯別調査票を作成し、つぎのような項目を中心に聞き取りを進めた。

「家の由来—何代目・分家・家の出身地」

「家号・家印・家紋・屋敷神・鎮守・手次寺・墓地」

「所有田畑山林—農地解放前・農地解放後」

「講・組・組合」

「世帯構成員—氏名・続柄・性別・年齢・教育・職業・出身地・公職村役」

森岡資料群の「島村教会調査」資料には、10世帯分の調査票個票がある。個票には森岡の聞き取ったことがらが手書きで書き込まれており、調査票を用いた訪問面接による聞き取り調査がおこなわれたことがわかる。世帯別調査票の個票には、その余白や裏面にたくさんの書き込みがなされている。

これらの調査項目によって、キリスト教の受容と家族の関係、伝統的宗教との関係、地域共同体との関係をとくにみようとしたことがわかる。

キリスト教は個人の信仰であるが、家長が受洗すると家族員は追隨して受洗したり、分家が本家にしたがってキリスト教を信奉したりする傾向があきらかにされている。

従来の仏教や神社との関係や先祖祭祀の実際を知ることで、キリスト教への入信が伝統的な宗教や習俗との摩擦や変化、共同体における伝統的な交流における軋轢が生じるという問題が浮かびあがってきた。これらを検討する際に森岡が着眼したのが戦後の文化人類学や社会学で注目され始めていた文化変容 acculturation という視点であった。

そこで、第三回調査では、フィールドワークにあたっての調査内容のメモには、とくに「祖先とキリスト教の神の関係、なぜ祖先を祀るのか」という点と「衣食住に関するキリスト教の影響—生活の合理化と結びつくのか」という問いが記されていることが注目される。これらの問いも含めて生活調査あるいは「キリスト教意識調査」を試みようとして、質問項目を列挙したメモが入っている。生活調査としての内容は仏壇や神棚、屋敷神、菩提寺や墓、家族内の人間関係、家の観念等を尋ねたい項目としてあげている。また「キリスト教意識調査」としては、「あなたの家では誰が一番早くキリスト教を信じたのか」「教会のどのようなことに心を惹かれますか」「キリスト教を信じてこれはよかったですとおもうことがありますか」などの問いがあげられている。

第三回目の調査では、16名の信者にインタビューを試みており、一人一人ていねいに聞き取っ

ていったことがわかる筆記メモ（録音はしていない）がある。

4.5 島村教会調査の成果「日本農村における基督教の受容」⁽²²⁾

1953年に刊行された『民族学研究』第17号の巻頭を飾った論文「日本農村における基督教の受容」は、当時、最先端の「文化変容」をあつかった論考として高く評価され、表紙の目次ではこの論文だけ題目が赤字で記される特別な荣誉を受けている。さらに、1954年には、第一回東京文理科大学閉学記念賞を受賞している。森岡にとっても、その後、安中教会、日下部教会・勝沼教会調査へと続くキリスト教会調査の最初の成果であった。

キリスト教という異質な宗教文化が伝統的な日本の農村になにをもたらしたのか、文化変容の実際が島村教会の信者への調査をとおしてあきらかにされた。島村にキリスト教がもたらされて70年近く経た1950年代初め、農民生活への多面的な影響は、伝統的農村社会で生きるキリスト教信者へのインタビューで語られたことをもとに論じられている。

キリスト教は倫理的な影響をあたえていた。禁酒禁煙や一夫一婦主義の強調である。しかし、宗教的儀礼の関わる結婚や葬儀では従来の習俗を踏襲しつつも、伝統的に酒の供給を欠かせない場面では控えるだけでなく他のもので代替する、あるいは部分的に承認する等、折り合いをつける折衷的な状況がみられた。

キリスト教家族における従来の仏教や神社、さまざまな伝統行事とのかかわりかたにおいては、個々に順応のしかたがみられた。総じて、神棚と屋敷神は消えやすいが、仏壇と祖先祭祀は容易に捨て去りえない。仏壇は家の神の最後の拠りどころであり、祖先の祭祀は文化中枢と考えられると森岡は指摘している。仏教的な年忌法要の儀礼的形式性を捨離して祖父母等の年忌は祭祀よりも追悼会としてとらえていた。そのような新たな意味賦与や解釈が可能であったのは、キリスト教の「汝の親を敬え」という誠命との共通性をみいだしたことによって融合されうるものとなりえたからであると森岡は指摘している。

地域共同体のなかでのたとえば神社の祭礼とのかかわりでは、本来ならキリスト教信者は参詣しないが、村のつきあいとしてできるだけ応分の負担を欠かさぬように村民に歩調を合わせることを心掛けていた。その一方で、個々人はそれぞれの場面に応じた解釈を個別に加えていた。

本来なら、農村社会においては根強い祖先崇拜と家父長的な支配構造や伝統の絶対性が作用し、農業経営のうえでも共同体的な働きが一般的であり、キリスト教的文化や倫理と相いれられず、キリスト教流布が阻止されるような条件がそろっていた。そこで、森岡があきらかにしたのは、キリスト教が受容されたプロセスにおける文化接触の具体的な実態であった。キリスト教文化とこれに対応する在来の固有文化の接点では、ときに激しく揉みあい、漸進的抵抗と受容、保持と変容の過程のなかで、個人のレベルでの意味づけや解釈をとめないながら、接触とそれにとともなう変化のさまざまな様相があった。三回にわたる現地調査のなかで、とくにインタビュー調査による信者たちの語りをもとに文化接触の具体的な実態を描き出したことは意義あることであり、1950年代のすぐれた質的調査として評価される。

5 研究キャリア形成期における調査スタイルの確立

森岡の研究キャリア形成を概観したうえで、とくに1950年代の二つの調査について、森岡資料群にある調査資料を探索し、当時あらわされた調査成果とも対照させながら調査の実践内容を検討した。

森岡は、大学教育のなかで社会調査を学んだのではなかった。鈴木栄太郎の『日本農村社会学原理』をテキストとして独学で勉強したほかは、調査実践のなかで試行錯誤し、さらに共同調査に参加することで調査のやりかたを学んでいった。その具体的な学びの実際と調査法の洗練を森岡資料群にある調査資料からとらえることができる。

1950年夏に取り組んだ労働省農村婦人調査は、森岡にとって「私の社会調査の明治維新」となった。その調査の特徴は、前述のように「全戸の世帯調査」「等間隔抽出の意識調査」「事例調査」という複数の調査法の組み合わせ、調査目的に適った調査地の選定、量的調査と質的調査を組み合わせた複数の調査法の適用、事前の調査内容の検討、調査対象者の抽出、調査者全員参加による予備調査（プリテスト）の実施、効率的な調査地訪問計画等、いくつもあげられる。よく練られたリサーチデザインであり、先進的な調査実践であった。

さらに、労働省職員もともに現地調査に取り組んだが、各地1週間の調査日程というかぎられた時間のなかで非常に効率よく調査日程が組まれ、組織化された調査が実施されている。各農村での世帯調査、調査票調査と事例調査の組み合わせをもとにして体系化された調査がおこなわれた。とりわけサンプリングやインテンシブ・インタビュー等、新たな調査法が先進的に導入されており、これらの点は、CIEでの社会調査を経験していた竹内利美が本調査を主導したことに依っていたことはあきらかである。

この調査経験は、森岡の調査スタイルの形成にとって大きな影響をあたえている。本稿でくわしくみた島村教会調査にとくにその影響は如実にみてとれる。

島村教会調査は、1950年1月、1951年10月、1952年5月と3回実施されている。1回目の調査は、教会関係者の聞き取りと信者世帯リストの作成、役場での史資料収集による集落の歴史と住民状況の理解、集落の住宅地図の作成、江戸期に名主であった地元有力者の信者へのインタビューをおこなっている。「島村を調査するにあたり注意すべき点」として「利根川の川中島」として大洪水にみまわれてきた歴史や畑作、養蚕・蚕種業等の地域特性がメモされている。このような調査地の概観的な現況把握と調査対象の情報収集が1回目の調査でなされていた。

その後、1950年7月8月に労働省調査を経験した森岡は、1年2か月後の1951年10月の2回目の島村調査では、「世帯別調査票」を作成して臨んでいる。全信者世帯に対する調査票調査を訪問聞き取り形式で実施し、世帯構成の詳細に加え、屋敷神や手次寺、組や講、組合へ加入を問う欄を設け、家単位・個人単位の宗教的实践を問い、また家庭内における宗教的行為を聞き取ってその情報を欄外に書き込んでいる。2回目の調査は、あきらかに1回目の調査とは異なり、調査票の導入においてその調査法は格段に洗練されて、まさに社会調査を実施したといえる調査実践となっている。3回目の調査では、農村婦人生活調査で農村婦人のライフヒストリーをとらえることを意図したインタビュー調査に準えることができるような信者へのインテンシブ・インタビューを実施している。

三回にわたる島村教会調査はいずれも3泊4日の現地滞在であった。限られた調査時間のなか

での調査実践であったものの、その調査成果は農村へのキリスト教伝播がもたらした文化変容の実証的研究として当時高く評価される論文に結実されている。この調査の効率性は、的を絞った調査課題の設定とそれに応じた事前準備によるものであり、合わせて「文化変容」という視角による論点の焦点化が明確になされていたことに依っている。1回目の調査と2回目の調査のあいだに、森岡は、労働省農村婦人生活調査を経験したことが大きく作用していたにちがいない。労働省調査においては、たんに個々の先進的な調査法だけでなく、調査の効率性をもたらす調査実践が具体的に体得されたのであろう。1950年代という研究キャリア形成期におけるこのような調査実践を経て、調査課題の焦点化された効率性の高い、現地での短期滞在型調査、ケースによって複数回の現地調査という森岡の一つの調査スタイルは築かれた。

注

- (1) 本稿の参考にしたのは次の8点の自伝的著作である。森岡清美1993『私の歩んだ道』（私家版）[「家・家族と宗教—わが研究遍歴の回顧と展望—」改題、森岡編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房、1986:376-394]、森岡清美2000『生きる』（私家版）、森岡清美先生喜寿記念誌編纂委員会2000『出会いの知的生態学—森岡研究室からの出発—』、森岡清美2002『日日新』（私家版）、森岡清美2003『年譜・著作目録』（私家版）、東京教育大学社会学教室交流会編2005『ある社会学徒達 それぞれの体験 実証研究の拠点で』、森岡清美2012『ある社会学者の自己形成—幾たびか嵐を越えて』ミネルヴァ書房、森岡清美2016『年譜・著作目録 再訂版 2016.10.28』[私家版]
- (2) 「わが研究遍歴」『私の歩んだ道』（1993:104-118）および森岡自身に調査キャリアを語ってもらったインタビューも参考としている。「第5章リサーチ・ヘリテージ 5-1 森岡清美先生インタビュー—「<調査遺産>としてのアーカイヴ化」研究の一環として「森岡清美先生が語る 2012年1月31日」（質的データ・アーカイヴ化研究会『質的データ・アーカイヴ化とリサーチ・ヘリテージ 2011-2013年度科研費研究成果報告書』2014:58-88）。なお、本章においてこのインタビューの語りを引用する場合、出展の記載は（2014:該当頁）と略する。
- (3) 森岡清美「わが研究遍歴」『私の歩んだ道』（私家版）、1993:104-118
- (4) 『民族学研究』17:2, 1953:1-14
- (5) 『社会学評論』9, 日本社会学会, 1952:41-51、『社会学評論』10, 1953:50-59
- (6) 『民族学研究』17-2, 日本民族学協会, 1953:1-14
- (7) 『家庭裁判月報』5-2、最高裁事務総局、1953:39-80
- (8) 『社会科学論集』1, 東京教育大学社会科学会、1954:110-161
- (9) 「町野町川西における真宗門徒の教団内婚」九学会連合『人類科学』6, 1954:219-232
- (10) 「宗教生活」九学会連合『能登—自然・文化・社会—』平凡社1955:210-244
- (11) 「重層的寺壇関係」原田敏明編『社会と伝承』2:1, 1958:1-9
- (12) 「真宗教団における寺連合の諸類型」岡田謙他編『家—その構造分析』創文社、1959:319-346
- (13) 「近世真宗本山の猶子関係」（上）『社会と伝承』4:1, 1960:18-30、（下）『社会と伝承』4:3, 1960:107-115
- (14) 「真宗大坊をめぐる合力組織」『社会科学論集』7, 1960:1-87
- (15) 森岡は、本章の草稿を確認した際、この箇所、「なぜ宗教から家族へ焦点が移ったのか」、その経緯について口頭で補足説明をおこなった（2019年6月19日）。そこでとくに強調されたのは、家族社会学の第一人者であった小山隆先生との出会いであり、小山が主導する共同調査や研究活動に参画したことである。具体

的には小山隆が研究代表であった「現代家族の研究」共同調査への参加や小山が組織した家族問題研究会での研究活動、国際家族研究セミナーの開催等があげられた。さらにルーベン・ヒルとの出会いも家族社会学へ本格的に進む後押しとなったと述べている。

- (16) 労働省婦人少年局 1952『農村婦人の生活—実態調査結果報告』
- (17) 労働省婦人少年局 1952:6
- (18) 労働省婦人少年局の調査報告書1952では、藤田たき（労働省婦人少年局長）による「はしがき」に「総司令部民間情報教育局社会調査課勤務の竹内利美氏」と記されている。
- (19) 「CIEにおける社会調査の展開」『民族学研究』（特集 社会調査）第17巻第1号、日本民族学協会、1953:68-80
- (20) 竹内利美は、労働省の「農村婦人の調査」について労働省の女性職員による企画によって農村女性の実態調査を実施したことが「比較的混み入った調査を、女自体がやったということが異色であった」と当時として画期的だったことを座談会で語っている。「戦後の日本における社会調査の動向」（『民族学研究』第17巻第1号、1953:63）
- (21) 第1回資料解説での説明より。なお、資料解説は、第1回2014年2月24日、第2回2014年10月15日、第3回2015年3月2日、三回にわけておこなわれた。
- (22) 『民族学研究』第17巻第2号、1953:101-114

【参考引用文献】

- 質的データ・アーカイブ化研究会編 2014『質的データ・アーカイブ化とリサーチ・ヘリテージ 2011-2013年度科研費研究成果報告書』
- 森岡清美 1953「日本農村における基督教の受容」『民族学研究』第17巻第2号、1-14頁
- 森岡清美 1993『私の歩んだ道』（私家版）
- 森岡清美 2000『生きる』（私家版）
- 森岡清美先生喜寿記念誌編纂委員会 2000『出会いの知的生態学—森岡研究室からの出発—』
- 森岡清美 2002『日日新』（私家版）
- 森岡清美 2003『年譜・著作目録』（私家版）
- 東京教育大学社会学教室交流会編 2005『ある社会学徒達 それぞれの体験 実証研究の拠点で』
- 森岡清美 2012『ある社会学者の自己形成—幾たびか嵐を越えて』ミネルヴァ書房
- 森岡清美 2016『年譜・著作目録 再訂版 2016.10.28』（私家版）
- 日本民族学協会 1953『民族学研究』（特集 社会調査）第17巻第1号
- 日本民族学協会 1953『民族学研究』17-2, 1-14
- 労働省婦人少年局 1952『農村婦人の生活—実態調査結果報告』

（一橋大学大学院社会学研究科教授）